

2024年2月18日 青戸教会 「荒れ野の誘惑」
聖書 出エジプト記17章3〜7節、マタイ福音書4章1〜11節、高橋克樹牧師

朝日新聞の夕刊で、13日(火)からすでに4回にわたって、イエスの箱舟の方々の現在の様子が女性の編集委員の方によって連載されています。この編集委員の女性の方が朝日新聞西部本社に在籍していたときに、何度もこの女性たちが運営していた「シオンの娘」というクラブの前を通っていたというところから連載が始まっているのですが、その時の印象が「なんか怪しい、妖しいと足を踏み入れなかった」と書いていて、「それって偏見ですよ。お恥ずかしい」と書いて、「いま純粹に、彼女たちがどんなふうに生きているか知りたい」という思いから、取材を始めたというのです。

実は、私20年ぐらい前に、仕事で博多に言った際に、有名な中洲の屋台でラーメンを食べたことがあったのですが、食べたあとに、ぶらりと散策していたのですが、その時、「シオンの娘」という看板を見つけてしまったのです。それで、イエスの箱舟の人たちがやっているお店だということを書いて、好奇心からちよつと覗いてみようと思つてドアを押して入ってみました。ドアには会員制と書いてあったのですが、まあ一見の客だと断られてもいいやという、本当に好奇心で入ってみました。「イエスの箱舟の皆さんですよ」と、こちらから話してみても、何か特別な反応があるのかなと思つて待つてみました。あつさり「そうです」と答えられて、ちよつと拍子抜けしたことを覚えています。身構えた反応が来るかと思つたのですが、そんなことはありませんでした。すでに主催者の千石イエスは亡くなられていて、その奥様の千石まさ子さんが接客をすることもなく、お店の片隅で鎮座して、女性たちの接客を見ていました。斎藤篤牧師と一緒にだったので、妖しいお店に入ることができたと思います。

1978年に東京の拠点であった国分寺から集団で蒸発したことで、「人さらい教団」「ハーレム教団」だとのパッシングを受けたことは非常にセンセーショナルでした。千石イエスのもとに集まった女性たちは、家庭環境に恵まれない人たちが多く、千石イエスの語る聖書研究会での話を柱にした集団生活をするようになったのです。ある意味、疑似家族を形成したわけです。自分の居場所を確保できない家族での生活は荒れ野で苦しい生活をしているのと同じ状況だったので、しょう。けれども、そういう家族から逃げだしたことで、家族から戻れコールの連呼を受けて、家族がマスコミの手を借りて取り戻そうとしたことで、センセーショナルな事件になって、その騒動から逃れるために集団で逃避行をしたことが大きな話題になったのでした。けれども、荒れ野の生活のような状況から逃れるために、千石イエスを中心にした疑似家族を形成したのですが、その疑似家族の形成が社会的な好奇の目にさらされて、静かな生活ができなくなったので、九州の博多に逃れたわけです。千石イエスを中心にした疑似家族を形成することで、それまでの荒れ野での生活のような家族から逃れようとしたことで、世間のパッシングにあつてしまい、疑似家族として漂流することになったのです。世間は千石イエスを中心にした疑似家族とみたのですが、おそらく、彼女たちにとっては、イエスを中心にした家族としての箱舟だったのでしよう。箱舟にみんなで乗り込んで神に救われる者たちになるという意識だつたように思われます。

さて、本日の聖書箇所は、イエスが霊に導かれて荒れ野に行くことになり、そこで40日間断食をしたあと、誘惑を受けたという物語です。この誘惑物語で最も注目すべきは、1節にあるように、イエスが悪魔から誘惑を受けるために、霊に導かれて荒れ野に行ったという記述です。つまり、イエスが悪魔から誘惑を受けることは神の意志であつたということなのです。神がイエスを試すために悪魔の誘惑にさらさせたというように読むことができます。書き方になっています。神

がなぜ悪魔によってイエスが誘惑を受けるように仕向けたのか。それは、私たち人間がこの世で生きていく際に受けてしまう様々な誘惑をイエスも身をもって味わう必要があったからです。人の苦しみがわからないで、人を救うことはできません。その誘惑は空腹に関わることであり、奇跡に関わることであり、権力に関わることでした。

第一の誘惑は、40日間何も食べなかったイエスは空腹でした。そこで、悪魔はイエスに言うのです。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」。救い主の力は、自分のためではなく、他人を救うために与えられているということを示しています。

第二の誘惑は、エルサレム神殿の屋根の端にイエスを立たせて、「神の子なら、飛び降りたらどうだ。神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に当たることがないように、天使たちは手であなたを支えると書いてある」と言います。これに対して、イエスは「あなたの神である主を試してはならない、とも書いてある」と反論します。私たちは、苦難に直面した時に、神を試みることがあります。「神さま、どうしてこんな苦しみに遭わせるのですか」と思わず嘆いてしまいます。

第三の誘惑は、イエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべて国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言ったのです。この世の権力と繁栄をつかさどっているのは悪魔自身だということです。人間の支配欲には、際限がありません。富と力ですべてを支配できるなら、どんな犠牲を払っても手に入れたいとを考えてしまうものです。けれども、私たちは教会において毎週礼拝を通して、神の御旨を自らに問う機会を与えられています。この礼拝行為は、ともすれば自己絶対化を目指して突き進んでしまいがちになる自分を顧みる機会となります。

また、教会での交わりは、神がそれぞれの信者に対してどのような導きを与えているかを知る機会ともなっています。もちろん、神が自分自身に対してどのような御業を成しているかを知ることが大切ですが、どちらかと言うと、教会の仲間に対する神の御業の方が理解しやすいところがあります。いずれにせよ、私たちは青戸教会において礼拝を守っています。いわば、この礼拝行為を通して信仰共同体を形成しているのであり、ある意味、同じ箱舟に乗って、共に救いに預かろうと意図している者たちの集まりなのです。共に、救いに預かろうとしているからこそ、信仰の切磋琢磨をする関係性にあるのです。

イエスの箱舟の皆さんは、今も聖書の話を千石まさ子さんが毎週行っていて、イエスを中心にした信仰共同体を志向しています。一方、私たちは、イエスの箱舟の皆さんのように共同生活を實際にはしていませんが、教会として教会墓地を持っていますし、礼拝においては既に天に召された聖徒たちと一緒に礼拝をしていると考えています。それは、神にあっては、天にあっては、地にあっては、同一の礼拝をささげている仲間だと考えているからです。どこの教会に属するかは、確かに個人の考えで選んでいるところがありますが、いったん信仰共同体として教会に属するようになったならば、そこが共に救いに預かる箱舟となるのです。私たちは、神の導きによって青戸教会に同時期に礼拝者として共に過ごすことになった者同士なのです。

イエスが荒れ野において悪魔の誘惑を受けたような人間的な危機に私たちはどこかで直面して教会の門をたたいているところがあります。そこには、神の見えざる救いの手が働いているのです。だから、私たちはいま青戸教会で礼拝をささげているのです。プロテスタント教会なので、個人の信仰的決断が強く求められますが、その個人の信仰的な決断においても神の見えざる救いの手が働いていることを思えたいと思います。